

生涯研修プログラム

4. パネルディスカッション 遺伝相談

3) 高齢妊娠と出生前診断

東京慈恵会医科大学講師 北 川 道 弘

近年少産少死のパターンが固定化し、妊婦の分娩や胎児に対する意識には大きな変化が生じてきている。また結婚の高齢化に伴う出産年齢の高齢化は、出生前診断数の増加として表われ、我々の遺伝相談外来を訪れるクライアントの大多数は胎児の異常を心配する相談である。社会環境の変化に伴う人権意識の高まりは産科領域において self decision の要求として表現されてきており、その意味でも出生前診断の果たす役割は重要であるといえる。

高齢妊婦の出生前診断として最もクライアントの関心の高いものはダウン症をはじめとする染色体異常である。我々の施設では1983年より過去10年間に1,000例を越える羊水染色体分析を行ってきたが、高齢妊娠であるための検査希望が約70%と高率で、関心の高さを示している。羊水穿刺は

超音波下で習熟者が実施しており、流産をはじめとする穿刺による risk は極めて低率である。しかし、あくまで妊娠子宮への穿刺であるため妊婦の意識、危険率、費用の問題などを考えると広く実施することは困難であり、screening 検査が望まれた。そこで平成4年4月より母体採血による triple marker (HCG, AFP, UE_3) による胎児異常の screening の準備をはじめ、平成5年4月より一般臨床検査として開始した。現在200名を越える分析結果を得たが screening としては優れた方法であり、この結果 positive screen の者に羊水分析を実施している。近い将来実用化される母体採血による FCS (fetal cell separation) 解析と同様に胎児異常を診断するうえで有用な武器と考えている。

4) 感染症と遺伝相談

名古屋市立大学助教授 鈴 森 薫

1941年オーストラリアの眼科医 Gregg により、妊娠初期に風疹に罹患した妊婦から高頻度に先天奇形児が生まれたとの発表を契機として、妊娠中のウィルス感染と先天奇形児との関連が注目されるようになった。しかし、妊婦がウィルスに感染したとしても、その種類も多く胎児への影響も異なり、風疹のように催奇形性の明らかなものから否定的なものまでである。現在、胎児催奇形性との強い相関がある病原体は、TORCH と呼称されており、妊婦に TORCH 感染が疑われる場合には厳重な管理が要求されている。

しかし、わが国では T であるトキソプラズマによる先天奇形の報告例はほとんどなくまず問題にならない。臨床上、相談を受ける機会の多いのは、

風疹、サイトメガロウィルス、パルボ B19の妊婦感染と胎児予後についてである。

ところが、これらのウィルス胎児感染を臨床の場で確認することは必ずしも容易ではなく、その対応に苦慮することが少なくない。近年、分子生物学的手法により、特定領域の DNA, RNA の増幅が迅速かつ簡便にできるようになっている。ウィルスにおいてもその例外でなく微量のウィルス核酸の検出が可能となり、胎児感染診断にも多くの新知見が得られている。本講演では、分子生物学的手法に基づき、これらのウィルス感染妊婦と胎児感染成立の関連を検討し、妊婦・胎児管理の指針を明らかにしたい。